University
Current
Review

ISSN 0288-1748 2022(令和4)年 5月20日発行〔隔月刊〕

［特 集］
大学等における「STEAM教育」の取り組み

大学時報

NO.404
2022.05

日本私立大学連盟

だいがくのたから
Thesaurus Universitatis

大阪学院大学

大阪学院大学 学院島臨海研修所 岡山県笹岡市　※島内中央が研修所

集会室と3つの研修室を備え、60名が宿泊可能

1974年に行われた新入生の海上セミナー

無人島がキャンパス　大阪学院大学　学院島臨海研修所

学院島臨海研修所は、大阪学院大学が１９７２年に岡山県瀬戸内海国立公園内の周囲約1.2㎞の無人島（差出島）に開設した研修施設である。

大阪学院大学は、創立者である白井種雄が１９４０年に開設した関西簿記研究所を源流として１９６３年に開学。「視野の広い実践的な人材の育成」を目的とする建学の精神を掲げ、教員と学生の心の触れ合いを重視し、ゼミナールを他大学に先駆け全年次で採り入れる等、人的交流を教育の根幹に据えていた。

研修所設置当時は全国的に学生運動が盛んで、大学と一般社会が連携する機運も高まっていなかった中、開所式の挨拶で白井は、「昨今やもすれば、研究あって教育不在といわれる大学教育の再検討が要請されているとき、本学は開学以来ゼミナールを中心とする教授と学生との人間的接触を重視し、穏健中正にして、実践力に富む近代的人材の育成を使命としておりますが、幸にして、本学に未だなんらの学内紛争もなく、本学教授団が、平和にして秩序ある基盤の上に、教育優先の理念のもとに、『建学の精神』を実践しつづけて来た成果」【以下略】と述べている。

学院島臨海研修所は、昔も今も本学の「建学の精神」を具現化する重要な施設であり、開設から半世紀を迎える２０２２年においても心身両面の錬成の場として白井種雄の想いは今も変わらず受け継がれている。

University Current Review

大学時報

2022.05／NO.404

CONTENTS

だいがくのたから　大阪学院大学　10
大学点描　松山東雲女子大学
巻頭言　女子教育の静謐なる重畳　高橋圭三
視点　大学教育を問い直す　三谷高康

座談会　海外交流の新しい形―コロナ禍の先にあるもの―　16
森下哲朗／熊谷嘉隆／丸楠恭一／倉林眞砂斗／（司会）山田健太

特集　大学等における「ＳＴＥＡＭ教育」の取り組み　32
データサイエンス学部における専門人材育成像　34
―滋賀大学の育成方針と実績―　竹村彰通／椎名洋／笛田薫
創造性を育むテクノロジー教育　長谷川敦士　40
数理・データサイエンス・ＡＩ教育の全学的展開　48
―法政大学における取り組みを例として―　小秋元段
ＡＩ・データサイエンス全学プログラム　樋口知之　54
ＳＴＥＡＭで先進的理工系教育を実践　60
―ＳＴＥＡＭ教育のフロントランナーとして―　佐藤元哉
「静岡ＳＴＥＭアカデミー」の挑戦　郡司賀透　66

ずいそう　オリーブの森に佇む看護大学づくりの話　片野光男　72

小特集　グローカルな視点からの組織的研究―取り組みと展望―　74
地域活性化のためのグローカルデザイン　中川淳司　76
〝地活研〟による地域課題への取り組み　古屋秀樹　80
地域連携の推進と「研究の見える化」への取り組み　小島和貴　86
札幌市立大学のグローカルな取り組み　安齋利典　90

表紙：ヤグルマギク

キク科ヤグルマギク属の総称。春から夏にかけて矢車に似た形の花が咲きます。ヨーロッパ原産でかつては麦畑の雑草でしたが鑑賞用に品種改良されました。花言葉には「信頼」「教育」があり、プロイセン王妃が王子たちを勇気づけるためにこの花で冠を作ったことに由来すると言われます。

＊表紙デザインでは教育・成長・向上を植物になぞらえ、1年ごとにさまざまな種・葉・花・実を紹介します。
5月号からは新しく花のシリーズが始まります。

96 私の授業実践～教育現場の最前線から～
高大社連携の遠隔アクティブラーニング
―九州産業大学の入学前教育―　中世古貴彦

100 明日への試み　國學院大學観光まちづくり学部
地域に根差した観光まちづくりのあり方を考える　西村幸夫

106 加盟校の幸福度ランキングアップ《ユニーク・コンテスト編》
「SEITOフォトコン」の魅力
同志社女子大学 学芸学部・文学研究科事務室（メディア創造学科）

108 数学を駆使して社会課題の解決を目指す
―数理工学コンテストのこれまでと展望―　西川哲夫

110 建築・デザインコンペ「わたしtoデザイン」の紹介　松本年史

112 クローズアップ・インタビュー
妖怪文化研究家　木下昌美さんに聞く　（聞き手）脇浜紀子

120 日本私立大学連盟の提言・主張
1 留学生の入国緩和、水際対策等に関する要望
2 日本への留学生のみなさんへ
3 ウクライナ侵攻に関する声明
4 学校法人ガバナンス改革に関する考え方

128 新会員代表者紹介　東京女子大学

129 執筆者・出席者のご紹介（掲載順）

131 私大連ニュース

134 編集後記

松山東雲女子大学の建学の精神は、

「信仰・希望・愛」であらわされるキリスト教精神です。

この精神に基づき、神を畏れ、神による希望に生き、神と隣人を愛する

自立した女性を育成する教育をめざします。

建学の精神

人を理解し、支え、育てる専門家に。

松山東雲女子大学は人文科学部 心理子ども学科 の１学科に子ども専攻、心理福祉専攻の２専攻が設置されています。
「子ども」「福祉」「こころ」を中心的な教育研究課題とし、人の理解と支援に関する専門的・実践的教育を行い、地域社会の創造に貢献できる人材の育成を教育理念とする女子大学です。
ここでは徹底した実践的教育が行われ、幼稚園、保育園や福祉施設での実習活動を中心としたカリキュラムが用意されています。

たおやかに学び、たおやかに生きる。

松山東雲女子大学で、たおやかに学び、その後人生も、たおやかに生きてほしい。そんな願いを教育活動に込めています。

“たおやか”とは、姿・形・動作がしなやかでやさしいさま。
そして、「たお」は、「竹がたわむ」などの「たわむ」と同源。
つまり、しとやかで、やさしく、しなやかで、ねばり強い、ということ。

女子大
続けます。

1886年、日本の発展のため、高い人格と豊かな文化性・国際性を備えた女性を育成する目的で、
本学園の前身である私立松山女学校が誕生しました。
あれから136年、学園は女性が安心して、のびのび学べる場所を守り続けてきました。
2021年の日本のジェンダーギャップ指数は世界で120位。※

まだ女子大を続ける意味がある。

※世界経済フォーラム「ジェンダー・ギャップ指数2021」より

30th Anniversary

Department of Psychology and Early Childhood Education
Faculty of Human Sciences
Matsuyama Shinonome College

松山東雲女子大学は 2022 年に創立 30 周年を迎えました

1992 年、これからの社会にとって真に有為な女性の育成をめざすという社会的な必要性に応え、本学は開学しました。ここに 1886 年から続く学園の歴史の中で、幼稚園から大学までそろった総合的な女子教育体制が整ったのです。学園創立 136 年、松山東雲女子大学創立 30 年。これからも東雲は、四国唯一の女子高等教育機関として、在り続けます。

松山東雲女子大学

人文科学部 心理子ども学科
子ども専攻・心理福祉専攻

University Current Review

大学時報

2022.05／NO.404

女子教育の静謐なる重畳

高橋 圭三　松山東雲女子大学・松山東雲短期大学 学長

1886年の春、松山の地で女子教育が動き始めた。同年9月16日に私立松山女学校が四国で最初の女学校として命の尊厳を自覚し、賢明で自立的な女性育成の歩を進める。時の流れの中で臥薪嘗胆の時代はあったが女子教育の正鵠を外すことなく、女性人材の育成をその時代に照らし模索実践してきた。

そして大学30周年の今、人の和、そして絆、心の温かさを大切に、凛としてたおやかな、地域社会から求められる女性人材育成を目指したい。

視点

大学教育を問い直す

三谷 高康
学校法人広島女学院院長
広島女学院大学学長

はじめに

地方の小規模の私立女子大学、加えて宗教系（キリスト教）の大学の学長として運営に苦心しながら大学教育のあるべき姿を問い続けてきた。その立場から、問題提起のようになるが一言述べたいと思う。

この2年間、世界的なCOVID-19の感染拡大が続く中、日本のほとんどすべての大学が授業の遠隔化を余儀なくされた。この対応は、これまで遅れていた大学のICTの局面を大きく変える進歩だと一定の評価を受けてきた。オンライン授業への移行については、本学も全学あげて様々な取り組みや努力を重ねてきた。

こうした技術的な側面の変革は迅速に行われたが、大学教育の根幹である人を育てるという点において、私たちが日頃からどのように取り組んできたのか、その点をみなさまと共に考えてみたいと思う。

1．大学の本来の姿：真理を求める

大学は、とりわけ私立大学は、社会の情勢に合わせて改革を進めてきた。それが、今回のコロナ禍対応の取り組みにも現れている。

しかし、大学の問題は実はそれだけではないと思えてならない。さらに深刻な問題が依然として横たわっていると感じている。

今も愛読書の一つにしている著書がある。哲学者のアラン・ブルームの『アメリカン・マインドの終焉』（“The Closing of The American Mind”）という本だ。21世

紀の今から見ると問題を多く含んだ内容となっているのは言うまでもない。表題からして“American Mind”と単数になっており、多様性を重視する現代のアメリカ社会からすると明らかに修正が必要だ。ヘンリー・スチール・コマジャー(Henry Steele Commager)の“American Mind”が手厳しく批判されているのと同様である。しかし、ブルームが、アメリカの大学は学問を行う上で最も大切な姿勢である「真理とはなにか」、あるいは「真理を求める」といった真理問題に対して真剣に考えなくなったと主張している点には同意できる。彼は極めて強硬に、アメリカは相対主義に陥ってしまったとまで結論付け、今でもその趣旨には耳を傾ける価値があると思う。

例えてみると次のようになるのではないだろうか。

広島女学院大学大学院の人間生活科学研究科修士課程の学生たちに意見を求めた事例を参考にしつつ、話を進めていくことにしよう。

学長の私が、広島女学院大学はキリスト教の学園である以上、聖書の教えを真理として教育すべきであると主張したらどうなるだろうか。

学生たちは「隣人愛といった倫理的な教えに対しては

広島女学院大学内チャペル内観

賛成だが、キリスト教の教義面を前面に打ち出すことなどには賛成できない。なぜなら大学は教会と同様ではなく、学問は客観的な根拠があって成立するものだ」と主張していた。自然科学に関心のある学生からは、学問は実験で検証できる客観的な真理であって、主体的な価値判断を含む真理主張は勝手な戯言に等しいと手厳しい批判が返ってきた。

社会科学系の学生からは、次のような意見が出てくるだろう。真理とは時代と地域、文化によってそれぞれ異なるものであり、絶対的な真理なるものは存在しない。むしろあるとすれば、それを成立させる構造のようなもので、真理とはきわめて相対的なものであると。

いずれにしろ、自然科学系も社会科学系も、それぞれ真理主張を持つため、大学という学問共同体ではまず「真理」をかっこに入れて教育研究を続けるほうが得策だと学生は答えてくれた。そこには自分たちの研究への自由度とお互いの尊重、あるいは専門外からの口出しは無責任だという意識が強いからかもしれない。いずれにしろ、真理はこうした実利的な道場において相対的に扱われるようになったともいえるだろう。

「宗教はみな同じ」という、投げ出したような表現を耳にすることがある。最近は世界の表舞台に宗教が現れるようになって、その重要性に気付き始めているが、今も大半の学生は批判的な立場で宗教を見ている。好意的であるにしろ批判的にしろ、宗教への態度は違っていても、共通する点がある。それは一見寛容に見えても、深くかかわろうとする気持ちはほとんどないということだ。ここに気を付けなければならない連鎖がある。寛容とは、実は無関心の類似語のようなものである。英語で無関心をindifferenceと言うが、同時に、区別しない、違いを見出さないという意味でもある。つまり「何でもよい」と言っても差し支えないだろう。

相対主義は寛容なようで、無関心であり、時には利己的でさえある。寛容とその結果としての無関心は、我々には他者を必要としないことにつながり、そうなると大いなる寛容は大いなる閉鎖に行きついてしまう。そう思えてならない。

書店の店頭に宗教関係の著書が並ぶ光景が目に付くが、宗教は社会人にとって必須知識であるというような極めて実利的な内容であり、死生観の会得や倫理観の醸成

とは程遠い状況がいまだに続いている。

もう一つ大学が直面する問題に、倫理の問題がある。

2．社会の不正と大学の責任

少し前になるが、ハーバード大学の学長だったデレーク・ボクが在職中に情熱を注いだ課題があった。それは大学教育における倫理教育の確立である。彼はその著書『Universities and the Future of America』のなかで次のように語っている。

「アメリカの大学は、おそらく全世界の最高水準の研究と教育を行っている。1年間で世界中から年間約80万人の留学生がアメリカへやってきて、研究や勉学に励んでいる。知識や科学技術においてアメリカの大学は世界の最高のレベルにあるからだ。ところがそのような立派な高等教育機関を持つアメリカが、なぜ国内では暴力が蔓延し、家庭が崩壊し、学校教育は低下し続けているのか。これらの諸問題は究極的には政府、企業、医療、学校などで働く個々人の価値観に関わる問題である。とりわけ、指導者的な立場の人々の価値観が決定的に重要となる。それに対して大学はいかなる貢献をしてきたのか。市民としての責任感、倫理的な自覚、他者への関心といった意識を教育することに真剣だったろうか。実利的な教育に偏る大学教育は果たして正しいのか」そうボクは説いたのだった。

これはアメリカのみの課題ではない。日本にも同様のことが言えるだろう。

産業界の不正はしばしば耳に入るが、政界でも法に反する行為が指摘されている。違法な行為に関係した当事者の多くは大学教育を受けている。貧困の格差は増大し、様々な差別は解消するどころか根強く残っている。

大学教育を受けた人口が増加しているにもかかわらず、社会はいっこうに良くなっていないという見解もある。

数年前、ベルリンで開催された日本とドイツの学長が集う会議に参加したことがあった。2日にわたって教育研究について議論が交わされたが、最終のプログラムの時のことである。ステージに日本とドイツの代表がふたり並んで座り、まとめに入ろうとしたところ、フロアーにいたドイツ側の参加者のひとりが「昨日の議論の延長ですが、おふたりは大学教育の目的は一体なんであるとお考えでしょうか」と根本的な質問を投げかけたのだ。日本側の代表は少し時間をおいて「専門的知識を教えることです」と答

国際英語ゼミ風景

えた。一方、ドイツの学長は即座に「人格陶冶です」と断言した。つまり、学生をして人格的な存在に育てることこそが大学の目的であると答えたのだ。

どちらも間違いではない。

大学が専門知識を学生に授けることは極めて重要なことだ。そのために大学は存在していると断言出来る。しかし、ドイツの学長が信念を持って強い口調で「人格の形成にある。ビルドゥング(独：Bildung)」と言い切った時には、思いもかけない言葉に触れた新鮮な感動があった。

大学教育には双方重要である。

専門知識を教えることのみに偏るとマックス・ウエーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の終わりの部分で語った「精神なき専門家」となり、営利を追求して不正を思いとどまる倫理観の欠如した人となる。一方、専門知識に欠けていると「心情なき享楽人(きょうらくじん)」になってしまい、その道を究めることが出来なくなってしまう。

大学の教育はこの両輪が機能してはじめて成功するものだと思う。

時代の急速な変化で、最先端の専門知識の賞味期限は極めて短くなり、加えて、コロナ禍で直面させられた予

測不可能なグローバル社会の変化に対して柔軟に対応するために学び続ける知性を涵養することも急務だ。しかし、同時に、多様性の重んじられる社会の中で、他者への関心、正義の追求、人権の擁護といった重要な倫理観を育てることも忘れてはならない。社会の良識をリードする存在として、いかなる時も高い見識に立った人を育てることが大学教育にとって最も重要な使命であると思えてならない。真理に対する敬虔な姿勢を教え、忍耐、正直、誠実さ、想像力、冷静な思考、人に共鳴する能力、未知なるものにおける謙虚さ、精神的なものに価値を見出すセンス、そして、何よりも神に対する敬虔さ、こうした「徳」を生み出す教育をもう一度見直すことがいま求められている。

キリスト教の大学の務めとして、こうした良識を育てていくべく努力を惜しまず続けていきたい。

（この原稿はロシア軍がウクライナに侵攻して一週間を経過した日に記述した。）